

菩薩半跏像（如意輪観音）

寺の伝説によれば、聖徳太子（574-622）は、この美しく絢爛な楠の像を依頼したときに、母親（穴穂部間人皇后）を念頭に置いていたといわれている。物思いの菩薩として知られ、信者は何世紀にもわたってその瞑想的な表現と穏やかで慈悲深い目を敬ってきた。仏教の伝承では、観世音は苦しみの兆候について世界を見渡す。半跏の姿勢と頬に微妙に触れる右手は、弟子たちからこの苦しみを取り除く方法を考えていることを示唆している。専門家は、この菩薩の優しい外観と、飛鳥時代の名高い傑作である法隆寺の夢殿観音のコントラストを比較している。

中宮寺の菩薩はかつては貝や牡の殻を加熱し、砕いて作った胡粉と呼ばれる白い顔料で塗られていたが、色は薄くなった。その黒檀の色合いは、何世紀にもわたって蠟燭やお香からの香と油と煙にさらされていることに由来している。弥勒菩薩は未来の仏としても知られているように、天に住み、地球に戻る不定の時間を待っている。この日本の国宝の神秘的な笑顔を、エジプトのスフィンクスやフランスのモナリザと比較する人もいるだろう。像の側面には薬師如来（癒しの仏）と、知恵の仏である阿閼如来もある。